

「佐藤千壺展 線と色で」にあたって

佐藤千壺さんは、私の陶芸工房の隣にアトリエを構えていました。

高千穂生まれの高千穂育ち。高千穂の山や谷で、一人遊びをすることが多かったそうです。佐藤さんの自然に対する繊細な感覚は、幼少のころの生活で培われたような気がします。

そんな佐藤さんも、東京の大学を卒業し、東京の企業に就職します。ところが、入社1ヶ月後、会社に向かわず、上野の西洋美術館に行ってしまう。そこで、ロダンのバルザック像に衝撃を受けた佐藤さんは、それまで美術に興味を持ったことさえないのに、あろうことか、美術家になることを夢見て、会社を辞めてしまいます。

そして、東京芸大をめざしたのですが、それは叶わず、32歳のとき、挫折感を懐いたまま宮崎に帰ります。

その後、宮崎で現夫人の幸子さんとともに、ジャズのライブハウス「アミーゴ」を運営し、ハンク・ジョーンズ、カーメン・マクレー、マル・ウオールドロン、アート・ペッパー、レッド・ガーランド、レイ・ブライアント、アン・バートン、秋吉敏子など、多くのミュージシャンを宮崎に呼び、宮崎にジャズ文化を根付かせたパイオニアの一人となりました。

ライブハウスを運営しながら、絵画や彫刻の制作も続けていました。ライブハウスを閉じた後は、脳溢血で後遺症の残った幸子さんのお世話をしながらの制作でした。

佐藤さんの作品は、絵画も彫刻もまったくの抽象で、しかも静かに内面に沈潜してゆくような作品のせいか、ごく一部の人にしか評価されませんでした。公募展に応募しても、自己主張の強い作品群に埋もれてしまい、選外になることも多かったそうです。しかし、ときに佐藤さんの絵に共感する審査員と出会い、受賞することもありました。そんな審査員に、画家の宇佐美圭司や評論家の田中幸人がいました。

今年、佐藤さんが転居することになり、アトリエからたくさんの作品が出てきました。大変残念なことに、既にその多くが廃棄されてしまいましたが、残された秀作を、公募展のような喧騒の場ではなく、ある程度まとまった個展として発表してもらおう機会はないかと願っていました。

その旨を、「スタジオM」の眞嶋一郎さんにお話しましたところ、作品を見たうえで快諾してくださり、「佐藤千壺展 線と色で」を開催できることになりました。

今回は、2007年から2009年にかけて制作された絵画「ストライプシリーズ」（全125点）から約30点と、それ以外の代表作も一部加えて展示します。

佐藤さんの静かな抒情詩のような絵画をご堪能いただけましたら幸いです。

松形恭知（国画会工芸部会員）